

有識者が指摘する 「光計測」の課題とは。



私たちの生活圏において、デジタルサイネージ(以下、サイネージ)は至るところで目にするようになった。この状況に対し、「明るさのマネージメント」の必要性を示唆するのは、大阪大学 工学研究科の准教授である福田知弘氏だ。今回、ディスプレイやLED照明などの輝度・照度の計測機器(輝度計)を開発するコニカミノルタ ジャパン(株)センシング事業部の中尾光孝氏とともに、サイネージの光の現状について伺った。

街 なかに、これだけサイネージが広まったのには明確な理由があり、福田氏も『サイネージを設置することで、経済の活性化が図られ、また広告的な側面だけでなく行政の情報共有、災害時の情報伝達にも効果的』と、メリットを語る。

一方で光の明るさに対する規制は多くの自治体で行われていないこと、それによりサイネージがあつて信号が見えにくいなどの交通安全上の不都合、窓から入る光で睡眠が妨げられるといった健康上の課題が散見されることを示唆した。そのため『運用上のマネージメント、アセスメントが必要になってくる』と述べ、行政と連携した社会実験を行ってきた経緯にも触れた。

こうした動きもあり、輝度を計測する機器、客観的な数値を安定して計測できる環境を提供してきたのがコニカミノルタ ジャパンのセンシング事業部だ。

同社ではいくつかのタイプの輝度計を実用化させており、明るさだけを測る一般的なものから、発光している光の色を数値で示す色彩輝度計、光る範囲を面で捉えてどこがどのくらいの輝度かを測る二次元色彩輝度計なども揃える。三脚やパソコンを必要とする類いもある一方、屋外のサイネージにも適したハンディタイプもあることから、計測に対する敷居



福田准教授がアドバイザー及び社会実験の監修として関わった事例(左:大阪駅前地区、右:渋谷スクランブルスクエアビジョン)。



を下げることで「明るさのマネージメント」に貢献する構えだ。

福田氏は『ディスプレイで必要以上の明るさを出し続けたら、壊れやすくなるのは確か。長持ちさせるためにも、また省エネや環境負荷の低減という点からも、明るさの規制は欠かせないテーマ』と強調する。

これら有識者の考えを周知する上で懸念されるのは、中尾氏の指摘する『照度や輝度という言葉、私たちは義務教育で習ってきていない。それなのに、仕事や研究のフェーズになると何かと出てくる』という現実だ。

コニカミノルタ ジャパンでは、光計測セミナー(参加無料、先着100名限定)をオンラインで定期開催中だ。施工業者だけでなく、ディスプレイメーカーも自動輝度調整機能などの開発時に輝度計は必要となる。少しでも関心があるようならぜひ、聴講していただきたい。福田氏も『世の中のサイネージ全ての輝度を調査しようとする、行政では背負いきれない。施工業者やメーカーがある程度の知見を持つのが理想』と、啓蒙に期待を寄せている。

光計測セミナーの聴講申し込みは左頁の二次元コードより受付中。



大阪大学の福田准教授。



輝度計について説明する、コニカミノルタ ジャパンの中尾氏。